



市川市文学館基本構想

2007年(平成19)3月

市川市文学プラザ運営協議会

全体の構成

1 文学館設立の趣旨

1 - 1	文学館設立の趣旨	2
1 - 2	市川の文芸風土の特色	3
1 - 3	市川の文学顕彰の現状	4
1 - 4	市川の文学顕彰の課題	7

2 基本理念

2 - 1	基本理念	8
2 - 2	目的	9
2 - 3	性格	9
2 - 4	機能	10
	(参考)「まちの文化」とは	11
	(参考)想定される利用者像と求められる機能	11

3 事業

3 - 1	資料の収集・保存	12
3 - 2	調査研究	13
3 - 3	展示	13
3 - 4	資料閲覧・情報活動	13
3 - 5	教育普及	14
3 - 6	パブリック・リレーションズ	14

4 基本計画に向けて

4 - 1	立地・建設計画	15
4 - 2	運営	15
4 - 3	スケジュール及び概算予算	15

1 文学館設立の趣旨

1 - 1 文学館設立の趣旨

千葉県市川市は、古代から現代に至るまで、文学的土壌の豊かな土地であり、多彩な文化人の活動の拠点となり、多くの文芸作品を育み、様々な文学活動が展開されてきた土地である。

その文化人の中には、文学史において、大きな功績を遺している著名な作家も少なくない。

これらの概要は、1982年（昭和57）刊行の『市川の文学』（神作光一氏監修）に詳述されている。

これまで市川市では、市民と文学を結ぶ施設としては、長年、図書館がそれなりの機能を果たしてきたが、市川の文学を体系的に研究し、かつ専門的に公開していく施設ではないため、資料の収集保存、教育普及活動などの観点から、必ずしも、十分な展開が図れたとはいえない側面もあった。

市川市では、こうした現状に鑑み、2005年（平成17）市川の文学に光を当て、身近なものと感じられる、新しい文芸発信の拠点として、生涯学習センター内に「市川市文学プラザ」を開設した。

ここでは、水木洋子寄贈資料を柱の一つとし、併せて、市川ゆかりの文人たちの業績を広く紹介することを目的に、企画展をはじめ、さまざまな事業が試みられている。

文学プラザが設置されたことで、関連資料の積極的な収集と、文学関係者の共感及び支援が得やすい体制は作られたが、既存施設の暫定的利用のため、今後の大きな展開には、不十分な点も否めない。

市川の文学が、真に市民の文化資産として共有化され、彩り豊かな文化と芸術を育む「文化都市」を築くためには、市川の文学を体系的に研究し、かつ専門的に公開していく機関として、「市川市文学館」を設立していくことが、不可欠であり、ここに基本構想をまとめる次第である。

1 - 2 市川の文芸風土の特色

市川の文芸風土の特色は、

1 時代 においては

古代の『万葉集』に真間の手児奈伝承が詠まれたのを嚆矢とし、平安時代以降は歌枕の地として、近世は江戸近郊の行楽地として、明治時代以降は東京にほど近い郊外都市として、現代活躍中の作家に至るまで、間断なく文芸活動が展開されている点を、大きな特徴とする。

2 地理的環境 においては

下総国府の置かれた『万葉集』の故地という基盤を根底に有し、下総台地・江戸川・真間川・砂州といった自然環境の多彩さが、さまざまな文芸作品の成立に作用し、江戸・東京からほどよい距離感にある遊山・ベッドタウンとしての土地柄が、多くの文人たちの活動を促す場所となっている点を、重要な特徴とする。

3 分野 においては

小説（永井荷風・幸田露伴ほか）、詩（宗左近ほか）、短歌（北原白秋ほか）、俳句（能村登四郎ほか）、川柳（阪井久良伎ほか）のみならず、脚本（水木洋子ほか）、戯曲（井上ひさしほか）、演芸（小島貞二ほか）、児童文学（梶山俊夫ほか）、外国文学（郭沫若ほか）、文学研究（麻生磯次ほか）、出版活動など、「文芸」ないし「文化」的なものも、周辺に抱え込みながら、広範囲に及んで展開している点を、他にみない特筆とする。

4 文芸的資産 においては

全国的な著名作家の創作から、市民の読書・文芸サークル活動まで、有名無名を問わず、多彩な文芸活動が展開されており、水木洋子邸・郭沫若記念館・紫烟草舎などの文学施設、図書館・公民館・文化会館をはじめとする文化施設、日本文学課程を有する大学など、文芸関連スポットも多く存在している点を、大切な特徴とする。

これら市川の文芸風土と、作家や市民の活動、そこで生み出された文学作品は、いずれも、市川が誇るべき重要な文化的資産であり、これらを体系的に次世代に継承し、まちづくりに資していくことが、行政としての責務であると考えられる。

1 - 3 市川の文学顕彰の現状

1 図書館を核とした文学顕彰

戦後の市川における文学顕彰は、1950年（昭和25）に開館した市立図書館が、長い間、中心的な役割を果たしてきた。当時の図書館は、著者を囲む会、読書会などには及ばず、市川ゆかりの著作コーナーや永井荷風文庫の設置、さらには、レコード鑑賞会、美術作品展など、さまざまな事業を行っていた。

2 読書活動を核とした文学顕彰

図書館の誕生から10年経った1960年（昭和35）には、市川市読書会連絡協議会が発足し、図書館と両輪となって、著者を囲む会や文学散歩などを積極的に行ってきた。

また、市内の小中学校でも、読書活動が盛んに行われ、学校図書館やPTAを核とした読書会や文芸サークル、読み聞かせサークルなどが、多く結成され、市民レベルでの文芸活動が盛んに行われるようになった。

3 文化行政を核とした文学顕彰

行政レベルでは、昭和40年代の「市川市史」編纂事業において、「市川の文学」の概観が試みられたのち、『市民読本 - 市川』（1966・昭和41 市川市教育委員会）、『下総文学のふるさと』（1972・昭和47 市川市立図書館）の発行などを経て、1982年（昭和57）には、万葉の時代から現代までの長期間にわたって、市川に住んだ作家、また市川を描いた作品を集大成した『市川の文学』（市川市教育委員会）が刊行され、行政における文学顕彰の一つの到達点を迎えた。

また、街なか案内板も多く設置され、歴史や文化的スポットの整備も、行政により進められていった。

4 市民団体を核とした文学顕彰

1945年（昭和20）藤野天光氏、村上正治氏らにより市川文化会が発足し、市川市の第一回の文化祭として、1948年（昭和23）に開催された市民俳句大会を契機に、市川市俳句協会が1956年（昭和31）に結成された。また、戦後の川柳活動の流れを受けて、川柳新潮社が1963年（昭和38）に結成され、これらは、やがて1974年（昭和49）の市川市芸術文化団体協議会へと結実し、ほかに市川市短歌協会、市川市演劇研究会などが、ここに加わり、市民団体を核とした市民レベルでの文芸顕彰の潮流が作られた。

また、俳句誌「沖」、文芸誌「花粉期」をはじめ、文芸誌の発刊も見られた。

1997年（平成9）からは、市民による市川市民文化賞が設けられ、能村登四郎氏、山本夏彦氏、木村光一氏、葉山修平氏、さだまさし氏、井上ひさし氏らが受賞、行政によらない市民レベルでの文化顕彰の動きも、見られるようになった。

5 専門的機関のないことによるマイナス

このように、市川の文学顕彰は、図書館、文化関係部署、読書サークル、市民団体などによって、広く豊かな展開を見せてはきたが、それらを体系的に把握する動きには至らなかった。また資料を専門に扱う機関がなかったことから、著名作家から貴重な資料の寄贈の打診があったにも関わらず、対応しきれなかった苦い経験も、いく度が見られた。

6 市民と行政の協働による文学顕彰

市川市では、文化振興を従来の教育行政の枠にとらわれず、より広い視野に立って展開させようと、1999年（平成11）から、文化行政を担当する部署が市長部局に移され、2002年（平成14）からは文化部が設けられた。

こうしたなか、市民主体に市川の文化人を顕彰しようという動きが見られ、1999年（平成11）には、行政が後押しをする形で、「第1回市川の文化人展 宗左近展」が開催された。

2000年（平成12）には、千年紀を契機に、市川市の芸術文化の魅力を市の内外にアピールし、活力あふれる芸術文化都市づくりを目指した方向性を打ち出す事業として、「市川2000年文化振興事業」が生まれ、「市川手児奈文学賞」創設、「市川の文芸風土シンポジウム」開催などが行われた。

以降、「市川の文化人展」では、永井荷風氏、小島貞二氏などを取り上げ、遺族との信頼関係を築くことができた。

2000年にはまた、第1回の「水木洋子の世界展」が開催され、翌年から、市民サポーターによる水木資料の整理が始められた。2003年（平成15）には、水木洋子氏の死去に伴い、財産の一切が市川市に寄贈され、市民サポーターと協働による資料整理と水木邸公開事業などが、一段と展開を見せた。

2002年（平成14）には、手児奈文学賞創設をきっかけに、市川市短歌協会が再組織された。

2002年度（平成14）には、「市川市文化振興ビジョン」が策定され、「街かどミュージアム都市構想」が提示された。

2004年（平成16）には、井上ひさし氏が、（財）市川市文化振興財団理事長に就任し、水木洋子シナリオ賞が設けられるなど、文学顕彰の機運が、さらに高まった。

また、市川市が顕彰する市川市名誉市民には、麻生磯次氏、小島貞二氏、永井荷風氏、水木洋子氏、宗左近氏など、文学者も多く含まれている。

こうして、市民と行政の協働による文学顕彰の機会が、目に見えて活発になり、市川の文芸風土を貴重な共有資産であると認識し、継承していこうとする市民意識が高まってきた。

7 文学プラザを核とした文学顕彰

以上のような事業展開を通じて、水木資料の整理、公開の必要性を筆頭に、永井荷風氏、井上ひさし氏、宗左近氏、小島貞二氏などの資料を、市川市としても責任を持って扱う局面が出てきたことなどから、市川の文学を体系的に収集、保管、展示、調査研究、普及活動を行う行政部署の必要性が、行政内部にも意識づけられた。

そして、東山魁夷アートギャラリーの跡地利用を検討するなかで、文学プラザの設置が決定し、2005年（平成17年）10月に、文学プラザが開館した。

文学プラザが開館したことで、関連資料の積極的な収集と、文学関係者の共感と支援が得やすい環境が整った。

運営には、学識経験者・関連団体・関係部署で組織される運営協議会を設置し、そこでの協議を経て、事業が進められている。

運営協議会では、さらなる文学顕彰の充実を図るために、文学館設置の必要性が、議題にあがっている。

2006年（平成18）には、市川市と（財）市川市文化振興財団により、「市川の文化芸術市民案内人養成講座」の一つとして「文芸コース」が開催され、文学プラザを核にした市民の積極的な参画が図られた。

2007年（平成19）の市川の文化人展では、井上ひさし氏を取り上げ、養成講座に参加した市民も関わって、事業の展開が図られた。井上ひさし展の様子は、全国的にも大きく報道され、市内外からの来館者の中には、市川の文学を紹介する常設の施設を望む声が、多く聞かれた。

2007年度（平成19）から、文学プラザを所管する文化部は、「観光」「シティセールス」も担当する文化国際部として再編成されることになっている。市川の文学を体系的に担う文学館の設置は、市川のブランド力を高める側面からも、不可欠なものと考えられる。

1 - 4 市川の文学顕彰の課題

文学プラザが設立したことで、市川の文学を体系的に収集、保管、展示、調査研究、普及活動を行う機能が、行政内部に形成されたが、既存施設の転用であること、十分な組織体制になっていないことなどから、次のような課題が見られる。

(機能的課題)

- ・文学プラザが、全国的に発信できる特色ある文学施設として認知されるように、役割の明確化が求められる。
- ・図書館との機能分担、とくに資料収集についての役割の精査が必要である。

(施設の課題)

- ・図書館書庫を共用で利用しているため、必ずしも、十分な資料収集保存機能を図ることができない。とくに温湿度管理・燻蒸設備がないことが、大きな課題である。
- ・既存施設の書架を転用しているため、より来館者に展示を楽しんでもらうためには、映像や音響装置を利用したビジュアルな展示、パソコンなどを利用した情報提供機能の充実が望まれる。

(人的課題)

- ・宗左近氏資料、小島貞二氏資料、そのほか寄贈や寄託が想定される資料が多くあることから、十分な資料整理調査を行える体制づくりが課題である。
- ・水木資料の整理作業は、市民サポーターとの協働で着実に進んでいるが、文学館資料としての装備、データベース化、目録の公開などに至っていないので、さらなる整備が必要となっている。
- ・行政職員だけで行なえる業務ではないので、外部の専門的人材の活用、市民の人材育成と活用が、一層求められる。

(事業的課題)

- ・文学プラザが、まだ市民に周知されていないので、広報活動の充実が課題である。
- ・文学プラザの機能を充実させるために、十分な調査研究や企画展準備、図録作成・広報誌の発行・各種講座の開催など、普及活動の展開を図るとともに、資料のデータベース化、電子資料化、インターネットでの公開などが求められる。
- ・『市川の文学』の改訂作業を進め、文学情報の蓄積が求められる。
- ・水木洋子邸との連携をモデルに、郭沫若記念館などとの連携も深める必要がある。
- ・水木顕彰の要素として映画という側面からは、映像文化センターとの連携が望まれる。
- ・既存の文芸団体の活動や、手児奈文学賞・水木洋子シナリオ賞などとの、事業の連携も、効果的に取り組んでいくことが望まれる。

市川市で文学館構想を進めるためには、これらの課題を改善し、さらに市川の文学の魅力を全国発信できるような基本理念を設定し、取り組むことが必要であろう。

2 基本理念

市川の文学顕彰の現状と課題から、以下のような文学館が望まれる。

2 - 1 基本理念

- 1 市川の文学を継承し、まちの魅力を再発見できる文学館
 - ・市川ゆかりの文学作品や活動は、市民共有の貴重な文化的資産であり、ここにすればそれらを知ることができる文学館であること。
 - ・そのためには、市川の文学関連資料が網羅され、市民が気軽に触れることができる文学館であること。
 - ・また、文学関連資料を通して、市川のまちの魅力を再発見できる文学館であること。

- 2 あらたな「まちの文化」を創造する文学館
 - ・過去の作品を継承するだけでなく、それらを通じて、学習活動や新たな文化活動ができる文学館であること。
 - ・文学館の存在自身が、市川の「まちの文化」の核となる施設であること。

- 3 だれもが親しめる文学館
 - ・文学に関心ある人が、集い、交流しあい、新たな文芸活動を生み出せる場所であること。
 - ・すべての年齢層の人が、文学を身近な存在に感じ、楽しむことができる場所であること。
 - ・市民はもちろん、市外から訪れる人にも、楽しむことができる場所であること。
 - ・障害のある人、日本語を母語としない人などにも、開かれたバリアフリーな空間であること。

- 4 市民と協働でつくりあげる文学館
 - ・市民や市内在住の文学者、関連団体とともに活動を展開する、開かれた文学館であること。
 - ・行政として果たす責務を認識し、十分な人的組織を有する文学館であること。

- 5 全国に発信できる特色ある文学館
 - ・市川の文芸風土の特性を打ち出し、市川の魅力を市内外にアピールできる文学館であること。
 - ・狭義の文学にとどまらず、映画、演劇、美術など、他の芸術分野も視野に入れた文学館であること。
 - ・市内外の類縁機関との連携を図り、街かどミュージアムのコア施設として、全国にネットワークを結ぶ文学館であること。

2 - 2 目的

市川ゆかりの文学等に関する資料を収集、保管、展示して、市民の利用に供し、学習の機会及び活動と交流の場を提供することにより、地域の文化、市民の教養の発展に寄与することを目的とする。（課題 図書館法 博物館法 との関わり）

2 - 3 性格

市川の文学の特徴は、万葉の昔から現在の作家まで、有名無名を問わず、しかも、映画、演劇、演芸、児童文学、出版、市民の文芸活動など、「文芸」ないし「文化」的なものも、周辺に抱え込みながら、広範囲に及んで展開している点にある。

市川らしい文学館は、その広い文芸風土の沃野に光を当て、市川の文芸の魅力を紹介していくことに意味がある。

したがって、他に多く見られるような、明治以降の小説・詩歌の作家を中心とした展示を主とする文学館的なものでは、市川の文学を充分顕彰することはできないと思われる。

また、水木洋子寄贈資料が、現段階での中核資料であり、水木洋子氏に関する情報や、映画・脚本分野を、大きな柱に据えることが重要と思われる。

さらに、全国的に注目される文学館としては、永井荷風氏に関する情報、あるいは、短詩型文学が盛んな地域であることから、短詩型文学に特化した資料構築などを、付加することも考えられる。

「街かどミュージアム都市」構想から見た場合、場所自身が意味を持つ、郭沫若記念館、水木洋子邸、木内ギャラリー、紫烟草舎など、エコ・ミュージアム論でいう“サテライト施設”のさらなる充実と連携を図り、その統合体としての“コア施設（中核施設）”となるような文学館の整備が望まれる。

文学館のかたち

全国的に文学資料を対象とするもの

（日本近代文学館、俳句文学館、日本現代詩歌文学館、神奈川近代文学館など）

特定の地域にゆかりのある文学者を対象とするもの（地域文学館）

（世田谷文学館、鎌倉文学館、さいたま文学館など）

特定の文学者を対象とするもの（個人文学者記念館）

（宮澤賢治記念館、林芙美子記念館、松本清張記念館、子規博物館など）

市川の場合は、 の性格を中心とし、 の性格（水木洋子、永井荷風など）を副とし、 の性格（短詩型文学など）を補助的に持たせるのが妥当と考える。

2 - 4 機能

1 収集機能

市川ゆかりの文学資料や情報を収集・登録・管理し、分かりやすい分類・検索システムによって、文学館内外で有効利用できるよう整備する。
博物館的機能と図書館的機能に留意して、収集を行う。

2 保存機能

収集された文学資料は、貴重な市民の共有資産であり、良好な環境のもとに、保存・継承していく。

3 調査研究機能

文学資料や情報について、専門的・学術的に調査研究を行い、市川の文学やまちの魅力や価値を明らかにする。
利用者の調査研究や地域活動へ支援を行う。

4 展示機能

利用者の文学への関心を高めるために、適切な展示を行う。
視聴覚メディア、デジタルデータなどを積極的に活用し、五感で受け止められる工夫をする。

5 情報提供機能

収集された資料は、利用提供を考慮し、データベース化を図る。
資料閲覧のスペースを設け、レファレンスサービスなどを行う。
他機関との情報ネットワークを図り、幅広い情報提供を行う。

6 教育普及機能

講座などの事業を定期的に行う。
ボランティアの参加の機会を提供する。
利用者の文学活動を支援する。

7 パブリック・リレーションズ機能

広報、出版、ネットワーク活動などを行う。

参考 「まちの文化」とは

・市川の文化は、万葉の歌などに象徴される歴史文化や、市川にゆかりのある多くの芸術家、文化人の活動などにより広く知られてきました。これらを、市民生活に活かすとともに、市川の個性として外に向かって発信し、交流を深めるなど、まちづくりに活用していく必要があります。

一方、このような市川固有の文化的資産に加え、地域の人々の生き方、暮らし方から生まれ、人々の暮らしの中に息づく「まちの文化」といえるものがあります。

まちの文化とは、身近な芸術・文化活動や私たち一人ひとりの価値観、生活様式から、市民活動までも含めた暮らし方すべてを幅広く文化として捉えるものです。

暮らしが多様化してゆとりが生まれ、自分自身の生活を重視するこれからの時代は、この「まちの文化」が人生に豊かさをもたらす重要な要素にもなります。そして、これを高めることは私たちの暮らしの中の豊かさを高めることにつながります。

このため、身近な芸術・文化活動、生涯学習活動や公共心を持って、地域に貢献する活動を活発化させるなど、多くの人々が参加して、お互いの生活に潤いをもたらす地域づくりが必要です。さらに、これらの活動を担う人材を育成し、地域に根づかせていく必要があります。また、国際化の進展によるさまざまな交流の中で、新しい文化の創造にも努めなければなりません。

このようにして私たちは、「まちの文化」と従来の文化的資産や芸術的資産を融合し、日々の暮らしの中に取り入れ、楽しみ、味わい、創造することにより、響き合う彩り豊かな市川の文化を育み、交流と活気が生まれるまちをつくります。

(「市川市総合計画 市川市基本構想」 平成12年12月より)

参考 想定される利用者像と求められる機能

1 初学者・子ども	市川の文学の概要を分かりやすく理解
2 観光・レクリエーション客	市川の文学スポット、著名人などへの関心誘導
3 文学に関心ある人	市川の文学の系統的理解と情報提供 レファレンス対応
4 水木に関心ある人	水木の業績の紹介と情報提供 映画史・市川の文学への位置づけ
5 文化活動・街づくりに関心ある人	市川の文学活動の文化的役割の理解と情報提供 活用への視点
「市川の文学」の基本的な情報	いつ来ても 提供している
「市川の文学」の新しい情報	定期的に更新 繰り返し来館できる

3 事業

3 - 1 資料の収集・保存

文学館の調査・研究・展示・普及活動に不可欠である文学資料を系統的に収集し、地域の文化遺産として永く保存する。既存の図書館との役割や分担を明確にする。

1 収集資料の範囲

市川出身・在住・寄寓文学者の文学資料 市川を描いた文学者の文学資料
古典文学から現在活躍中の作家まで
市川ゆかりの文芸サークルや結社に関する資料
近隣地域に関する文学資料
その他文学館運営に必要な資料

2 資料の分野

古典文学 伝承文学（軍記物 近世地誌 寺社縁起 民話）
近代文学 現代文学（散文 市川で暮らした文学者 市川を描いた散文）
短詩型文学（短歌 俳句 川柳 詩） 児童文学 漫画・書画・挿絵
演芸（演劇 映画 舌耕芸 大衆芸能）
外国文学・翻訳 文学研究・国語教育 編集・出版
個人コレクション（水木洋子 宗左近 小島貞二ほか）
市民文芸活動資料（読書会 学校 図書館活動 市民団体資料 など）
市内文学関係事業情報 近隣文学情報

3 資料の種類

図書 雑誌 新聞 切り抜き 印刷物 原稿 書簡 自記資料
図表 書画 写真 映像 音響 遺品、愛蔵品など

4 収集の方法

正確な調査に基づき、計画的に収集する。
寄贈、寄託、購入などにより収集する。
重要な資料については、専門家による審査を経て行う。

5 資料の保存

長期にわたる大量の資料の収集に応じられるよう、十分な収蔵スペースを確保するとともに、空調等に配慮し、適切な保全管理を行う。

3 - 2 調査研究

文学館活動に必要な調査研究を行い、資料の収集、展示、普及活動に役立てる。

- 1 市川ゆかりの文学者及び文学資料
- 2 収集対象資料及び収蔵資料
- 3 その他文学館活動に必要な調査研究

3 - 3 展示

1 常設展示

市川の文学に関する基本的な情報を、文学的・歴史的価値をふまえて紹介する。

2 企画展示

調査研究の進展や、資料収集の状況をもとに、新しい文学的興味を呼び起こすテーマで展示を行う。

- 1 市川ゆかりの作家や作品を深く掘り下げた企画
- 2 新しい文学状況を意識した企画
- 3 既存の文学展の枠組みにとらわれない親しみやすい企画

3 展示の方法

常設展示、企画展示ともに、わかりやすさを基本とし、利用者の知識、興味、関心の度合いに応じて選択できるようにする。

フレキシブルな展示構成が可能なよう、可変性の高い造作を基本とする。

視聴覚メディア、デジタルデータなどを積極的に活用し、五感で受け止められる工夫をする。

講座なども合わせて企画することで、より効果的な理解を深める。

3 - 4 資料閲覧・情報活動

市川ゆかりの文学者、作品について、体系的な情報提供を図るため、資料閲覧コーナーを設ける。そこでは、レファレンスサービスや、コピーサービスなどを行う。

基本的な図書・雑誌は開架資料とし、書庫資料についても、可能な範囲で閲覧に供する。ただし、貸出は行わない。

所蔵資料はもちろんのこと、市川ゆかりの文学情報について、データベースを構築し、各種情報の提供にも、対応できるようにする。

既設の図書館とは、とくに連携を図る。

調査研究の成果について、目録、出版物、インターネット、講演会などを通して、広く公表する。

3 - 5 教育普及

- 1 文学講座、講演、文学散歩などを定期的に行うとともに、演劇・映像・音楽・美術など、文学と関わりの深い分野のイベントも行う。
- 2 市民の創作講座や、作品発表の場を設け、市民が主体的に活動できるような機会を作る。
- 3 「友の会」等を組織して、市民とともに事業を行う。
- 4 市川で活動する文学に関わる個人、団体との交流を図り、諸活動を支援する。
- 5 学校教育や生涯学習機関と連携を図り、効果的な事業展開を図る。

3 - 6 パブリック・リレーションズ

- 1 文学館が地域社会に役立つ機関であることを理解してもらうため、印刷物の発行、インターネットを通じた情報発信、さまざまなメディアを利用した広報活動を行う。
- 2 館内にミュージアムショップや、喫茶コーナーのようなくつろぎの場を設けることも検討する。
- 3 既設の図書館、街かどミュージアム施設との連携、役割分担を明確にし、文学館の社会的役割を効果的に高めるよう努める。

4 基本計画に向けて

4 - 1 立地・建設計画

- 1 市内外から来館しやすく、他の文化的施設との積極的な連携を考えた立地箇所の選定を行う。
- 2 建物自体からも文学的雰囲気を感じられ、周辺環境の整備にも配慮する。
- 3 文学館の各種機能が満足に果たせるよう、屋内外のスペースを充分にとる。
- 4 子ども、高齢者、障害者など、誰もが利用しやすい施設づくりに努める。
- 5 既設の文学プラザの運営のノウハウを踏まえた建設計画を行う。
- 6 計画の段階から、学識経験者や市民の意向が反映されるように努める。

4 - 2 運営

- 1 市直営方式、委託方式とにかかわらず、専門的知識を有する職員を十分に配し、運営に当たる。
- 2 運営協議会、各種委員会などを設置し、また「友の会」を組織するなど、広く文学関係者などの協力・参加を得るようにする。
- 3 既設の図書館や文化施設との連携を取り、社会や市民のニーズに柔軟に対応できる運営体制を図る。

4 - 3 スケジュール及び概算予算

- 1 文学館のハード的、ソフト的側面について、十分な検討ができるスケジュールで計画を進める。
- 2 文学館の各種機能が満足に果たせるよう、十分な予算措置を講じる。

市川市文学プラザ運営協議会 2005年(平成17)年4月27日～

神作光一 (東洋大学名誉教授 和歌文学 歌人)
葉山修平 (駒沢短期大学名誉教授 作家)
秋山忠彌 (近世文化史)
岡本文子 (和洋女子大学教授 近代文学) 平成18年度より参加
神田重幸 (東洋大学教授 近代文学) 平成18年度より参加
松岡久美子 (市川市文化芸術専門員)
加藤 馨 (水木洋子市民サポーターの会会長)
鈴木正義 (市川図書館友の会会長)

小原みさ子 (市川市文化振興財団館長)
漆原利一 (市川市中央図書館館長)
太刀川寛 (市川市映像文化センター所長)
増田裕子 (市川市中央図書館副主幹)

事務局

能村研三 (市川市文化部長)
桑原利明 (市川市文化部文化振興課長)
根岸英之 (市川市文化部文化振興課主査)

市川市文学プラザ運営協議会開催記録

2005年度(平成17)	4月27日	5月25日	6月24日
	7月27日	8月31日	9月29日
	11月30日	1月24日	3月14日
2006年度(平成18)	5月12日	7月28日	9月28日
	11月17日	1月12日	3月22日

市川市文学館基本構想

市川市文学プラザ運営協議会 編

市川市文化部文化振興課 発行

2007年(平成19)3月30日

272 - 8501 千葉県市川市八幡1 - 1 - 1

047 - 334 - 1107

<http://www.city.ichikawa.chiba.jp/bunka/index.html>
